基調報告

現代宗教研究所所長　中野文海

今回の中央教研は、昨年の「身延教研宣言」を踏まえ、その具体化に向って前進することが大きな目標であり、統一テーマとして、「立正安国の精神と八十年代の教化活動―教化の場としての寺院と教化の担い手としての教師の在り方を考える」を掲げ、同時に、昨年の決定に基づき、七つの部会別に夫々のテーマについて二日間の討議を行うわけであるが、これらを進めるに当り、基本的な考えを申し述べたい。

一、八十年代をどう捉えるか。

戦後三十数年を経過し、既に明らかになりつつあることは、

1　ルネサンス以来の近代文明、近代合理主義は行きづまりを示している。

2　行きづまり打開について、既に五十年代、六十年代から、西欧の思想家は東洋に注目し、インド、中国、日本の思想に、更にはその風土、信仰等にも眼を向けつつある。

3　近代合理主義の行きづまりは、非合理主義の台頭となって現われている。例えば、SFブーム、オカルトブーム、易、占いの盛行等、七十年代をかえりみる時、次々に浮んでくる。そして、八十年代は多くの非合理なものの中から、より確実なもの、より深いものを求めて、思想と信仰へ向うといわれている。特に、謝世輝氏（東海大学教授）は、仏教の世界化、特に法華経を中心として、仏教がより多くの人々の関心を集める時代が到来する可能性があると言っておられる。

二、教団の将来を考えるにあたり、諸宗教の過去の歴史を振りかえることは無意味ではないと考える。そして、それを通して、教団が存立し、発展し、或は哀亡したのは何故であったかを考えると、次の二点に要約できると思われる。即ち

1　社会――夫々の時代、夫々の民族、夫々のもつ文化及び伝統等を含めて――に如何に適応したか、更には適応せんとしたか。と同時に如何にその「独自性」を保持し、保持せんとしたか。（このことについては、前

立正大学仏教学部長（現東北大学教授）塚本啓祥先生が、詳説されている。）

2　普遍性をもった教えを如何に特殊化したか。

以上二点である。

三、二に挙げたことを敷衍する。即ち、巨視的に主要教団（三大宗教）の歴史を通観してみる。

1　キリスト教

砂漠の多い乾燥地帯にセム系ユダヤ人の宗教をもととして生れたこの宗教が、支配者たるローマ人の間に定着するのには、幾多の困難があった。即ち、独自性を主張するが故に相つぐ迫害があり、ローマ社会への適応は、容易ではなかった。にも拘わらず、キリスト教は民衆の中に浸透し、権力による大弾圧――特に軍人皇帝時代の――も遂にこれを絶滅することは不可能どころか、かえって彼等の数を増やし、その団結の力を強める結果となり、帝国は弱体化し、四分国統治という形をとらざるをえなかった。四世紀始め四分国の一つの王となったコンスタンチヌス帝の英断は、この不思議な力のあるキリスト教を弾圧するの愚を避け、自らをその中に投じ、彼等を味方とすべく、ミラノ勅令を以て、これを公認した。そして、同世紀末にはローマの国教とされるに至ったのである。

時間的にみるとローマ社会に定着するには約四世紀を要したことになる。

次に民族大移動後のゲルマン社会への普及定着の跡をみると、八世紀中葉のピピンの寄進、チャールス大帝のフランク王国の統一、更には十世紀の神聖ローマ帝国の誕生等はその定着度を示すものとすれば、概ね、五世紀前後を要したとみてよいと思われる。（後略）

このように普遍性をもったこの教えが異質の社会に適応し、教団の基礎を確立するには相当の時間を要したことは明らかであるが、同時に独自性を保持し、或は、教義上の異論に対し、教団としての統一見解をまとめ、他を異端として退ける為には、四世紀前半におけるニケーア、五世紀のエフェソスの宗教会議にみられる如く、衆智を集め、長期間の討議を行い、結論を出してこれを実行に移すという慣行を重んじている。このことが重大な危機――教団の――に際して常に行われたことは歴史の示すところであり、最近では、第二次大戦後の世界情勢の大変動に対応するカトリック教会の在り方を協議策定するため、パウロ六世の時に一九五〇年代後半から六〇年前半にかけ、ヴァチカンに世界各地から参加した聖職者を集めて行われ、その結果、各地域の異った宗教に接触し、研究し、交流を深めることにより、カトリックの新たな前進を企図しつつあることは明らかな事実である。

又、独自性を保ち、適応への努力の中核となる教師（僧侶）自身の自己修錬の為の修道院運動も見逃すことの出来

ないことである。

五世紀にモンテカッシノに最初の修道院が造られた背景は、国教化の当然の帰結としての僧侶の腐敗堕落があったと考えられ、更に九世紀にクリュニー修道院が設立され、十字軍戦争期にかかる時期のローマ法王が多く、この修道院出身者で占められたことも、教師自身の自覚と修錬により、教会の廓清と、新たな発展の原動力たらんとする意欲の現われと見ることができる。

この宗教会議と修道院運動の果したローマ教会の歴史における役割は実に大きなものがあったと考えられ、今日、ローマ法王の影響力が、比較にならぬ大きさを宗教界のみならず、世界政治の上にも保持しえている所以はここにあるといっても過言ではないといえよう。但し、結果的にみて功のみでなく、罪の一面もあるが、後の機会に譲る。

何れにしても、カトリック教会の歴史を通して、宗教会議と修道院運動の果した自浄作用としての働きは、我が教団として、大いに参考とすべきものがあると考える。

この中央教研は少くとも本宗内においてはより普遍性をもった宗教会議であり、地方教研は、夫々の特殊性に対応した宗教会議と位置付けることも可能であろう。但し、日本という小さな地域におけるものであるが。

ついでながら付言するが、「一天四海、皆帰妙法」の祖願達成云々とは常に自らも唱え多く耳にすることであるが、具体策が乏しいのが宗門の現状ではないか。若し、真に祖願達成を思うならば、法華経や御遺文の英訳のみでなく、少くとも、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語等の訳も宗門においてなすべきであり、その為には、夫々の言語に通じたスタッフを数名位宛持つような宗門でなければならないと念願するものである。

2　イスラム教についてであるが、余り詳しくないので、誤りを避ける為、伝播の跡づけのみとする。

マホメットが啓示を受けたのは六一〇年とされるが、紅海沿岸の隊商路のイスラム化の契機となった六二二年のヘジラ（聖遷）――イスラム紀元元年――を起点として考えると、アラビヤ半島のイスラム化はほぼ三十年、オリエント一帯は五十年、アフリカ北岸からイベリヤ半島（ピレネー山脈以南）は百年で完了している。正に異例のスピードである。浅い知識で誤りがあるかも知れぬが、平等主義に徹したことと、不信仰税の存在にその秘密があるように思われる。これが、異質の社会に適応しえた鍵ではないかと考える。独自性という点ではアラビヤ学という名称の示す通り、コーランの研究を各地域で主要な学問とし、特に聖職者はアラビヤ語学習を重んじ、コーランを源泉として、生活規範を作り、これを信徒に遵守させたことは、異質の民族、異った地域であっても、相通じた生活面を共有させるに至った所以であろう。今日、イスラム世界は政活、経

済的には必ずしも一体ではないが、何時でも一体化しうる基盤はあるといえるし、若し、一体化した場合の力は国際的に端倪すべからざるものがあろう。

3　仏教がインドに一応定着したのはアショーカ王の時代とみて約三世紀、中国に仏教が入ったのは紀元前後で、宗派仏教時代となったのは隋唐の時代であるとするならば約七世紀、日本渡来は六世紀前半で、鎌倉仏教成立以後を定着期とみると約六世紀を要したとみてよかろう。

以上、キリスト教特にローマ・カトリックを主とし三大宗教の歴史を巨視的に、而も、適応と独自性という視点に立って見て来たのであるが、仏教特に本宗に限定して考えて、将来の在り方を考究することは、我々に課せられた重大な責務であると思う。

実は、本教研会議十三年の歴史は、意識的であると無意識的であるとを問わず、この視点に立って進められて来たものといえるし、今後、益々その必要性を痛感するものである。

現状、少くとも数字的には既成教団中第五位に在り、新興教団の七十パーセントは、日蓮系（題目系）といわれる事実と、既述の八十年代の予測される可能性を考えた時、今後の時代は本宗にとり希望に満ちた時代であり、それだけに我々の為さねばならない多くのものがある時代といわなければならない。

本教研会議こそは、叙上の意味において、宗門の将来の尖兵となり、中核となるべきものであると信ずるものである。